11/19 京新

# 物価高 40年前より 負担大

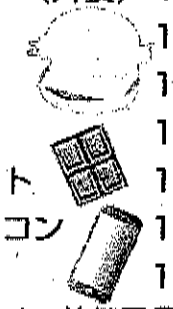
## 10月 歴史的伸び率に

10月の消費者物価は40年ぶりの歴史的な上昇率となった。食品の値上げラッシュが家計に重くのしかかり、コスト増のしわ寄せで生産者や小規模な店舗の苦境も深まっている。業績が堅調な大企業では賃上げに前向きな動きもあるが、中小企業を含めた幅広い波及は見通せない。

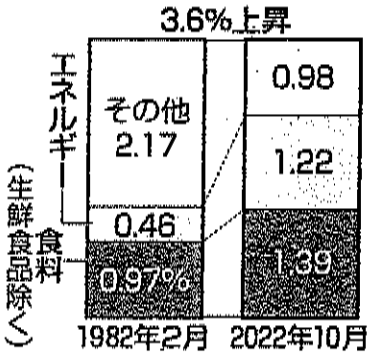
### 10月の主な値上げ品目と上昇率

| | |
|---|---|
| ハンバーガー(外食) | 17.9 |
| 回転ずし | 12.9 |
| あんパン | 13.5 |
| 唐揚げ | 11.1 |
| チョコレート | 10.0 |
| ルームエアコン | 13.3 |
| 携帯電話機 | 16.5 |

※総務省調べ、前年同月比%



### 消費者物価指数の上昇要因比較




※ニッセイ基礎研の提供データから作製。四捨五入のため合計は合わない場合がある

## 食品とエネ中心／82年は賃上げ7%…

▽廃業も

開店前から行列ができる地元の人気店「西洋菓子おだふじ　大泉学園店」（東京都練馬区）は焼き菓子やカットケーキに加え、十一月からホールケーキを最大で二百円程度値上げした。ケーキの作り方を工夫するなどでコストを切り詰めたが「限界だった」（同店の中條広幸さん）。過去の値上げでは販売に影響した商品もあるという。

原材料の生産者も状況は苦しい。牛の飼料などの高騰で、牛乳向けの生乳の生産コスト（十一月時点）は二年前の水準と比べて一キロ当たり約三十五円も上昇。乳業メーカーへの出荷価格を十一月分から十円引き上げたが、関東の生産者団体の担当者は「全くカバーできておらず、廃業を決めた酪農家も増えている」。

▽備り

同じ3・6%の物価上昇率でも今回と四十年前では内容が大きく異なる。ニッセイ基礎研究所によると、一九八二年二月は指数の伸び率のうち食品とエネルギーの割合が四割程度だったのに対し、二〇二二年十月では七割以上を占める。人件費の比重が大きいサービス価格も上がっていた四十年前に比べ、円安による輸入価格上昇でモノに偏った物価高の姿が鮮明だ。

自動車など輸出産業がけん引し、大手企業の賃上げ率が八一、八二年と二年連続で7%を超えた当時について、日本総合研究所の山田久副理事長は「モノの価格も賃金も上がることが当たり前の時代だった」と振り返る。しかし半導体で韓国や台湾の企業が台頭するなど「ものづくり大国」の輝きは色あせ、日本経済の停滞感は強まる一方だ。

▽温度差

上場企業の二三年九月中間決算は純利益合計が過去最高水準となり、賃上げを求める空気は強まりつつある。ただ財界の関係者は「大企業は賃上げに前向きだが、コスト高が直撃した中小はそれどころではない」と明かし、企業側では規模による温度差が否めない。

二二年春闘では賃上げ率が2・2%にとどまった。日本総研の山田氏は、来年の春闘について「（高水準の賃上げが続いた）八〇年代のような状況に戻る展望はない」と指摘した。